

---

# 変わり者達の白昼夢

花村漁火

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

変わり者達の白昼夢

### 【Nコード】

N33420

### 【作者名】

花村漁火

### 【あらすじ】

“異界” 黒い門の奥には異なる世界が、異界は小さいながらも人を飲み込むほどの力を有し、世界に現れる。

“封道” 異界を閉ざす専門職、国家資格の中でも最難関であり、その業務に命の保証はない。

“探偵” その封道師の生存率を上げるために設けられた先遣隊。

大正22年。

世界はゆっくりと、動きだす。全ての意味を孕んで。

## 第一話：仕事

外は近代文明の発展の証とでも言わんばかりの、同じ背丈の建物が、街を一つの迷路にするが如く区画化されており、街灯も等間隔、路面電車とバスと車は決められた道を走り、ただ人間だけが乱雑に動き回る。

そんな外の風景を、自分の事務所から眺めるのは、ここ華村探偵事務所の所長、華村薫である（はなむらかおる）。

彼女は何かをするでなく、ただなんとなく外を眺める。その理由は簡単だった。

「暇っ!!!」

おもむろに眉間にしわを寄せ、般若のような形相で言葉を発するが、虚しく宙をさまよい泡のように消えるのみ。

それを聞いていなかったのかと、首だけを背もたれから投げ出し工法を見ると、逆様になった副署長が眼に映る。

彼の名前は花崎寿也<sup>はなさきひさや</sup>。丁度お茶を沸かしている最中だった。

いつものことなので、花崎は無視を決め込み、自分の分だけのお茶を入れて応接用の椅子に座り、応接用の机にお茶を置き、手を伸ばしてカステラを取り出し、くつろぐ体制を作った。

そう、所長の机は一つバカでかいものがあるのにもかかわらず、花崎の机は無い。最近花崎がはまっている反抗理由だ。

「茶あ飲んでる暇あつたら、仕事の一つや二つ稼いで来い」

「また役人さんか、斬賭<sup>キルト</sup>連盟に怒られますよ」

「知るか、こちとら人命救助ですよって……ああ、頭に血が……」  
薫は至って真面目だったが、自分のふざけた体制を反省し、椅子をクルッと反転させ、花崎の方へと体を向ける。

「とにかく、私にもカステラ」

そんなこんなで一日が今日も過ぎて行きそうだった。

花崎からカステラを受け取ると、薫はまた通りの方へと体を向け、

せわしない人の波を観察する。騒ぎが起きないかどうか、仕事が舞い込んでこないかどうか、彼女は真剣に、別の言葉で言いかえれば、御金欲しさに外を監視する。

すると、視界の右端、窓からギリギリ見えるか見えないかの位置で人が騒いでいる。薫は窓を開けて体を乗り出し外を見ると、遠くの通りに黒い塊のようなものが見える。

薫は嬉々とした表情を浮かべ、カステラを一気に口に頬張り、駆け出しながら颯爽と花崎のお茶を盗む。

「あーっ！！」

「仕事だ寿也、支度しな」

「はい、どいてどいてー」

街中に現れたソレは異界。黒く混沌としていて、奥を覗くことは不可能。

少しの吸引力を持っており、その異界よりも小さいものを、個体単位で連れ去っていく。

個人の力での事体収拾は難しく、そのほとんどを国に任せているため、一般人が見る機会は、こうして街中に突如として表れた時くらいだ。

「はい、待った待った」

そして薫の前には一人の男が、どこからともなく降ってきた。そう、まるで一瞬飛びあがったかのように、突如としてそこに現れたのだ。

男は君の悪い笑顔を浮かべ、糸目は薫を睨んでいるのか、それともみつめているのかわからないほどだった。

その数秒後、男の仲間であろう数人がかけつけ、同時に花崎も合流する。

「みんな集まって丁度いいな、さうて、みんなは民間人の避難をよ

るしゅ〜」

「なんのつもりだ、ハナレ」

男の名前は傍先離そばさきはなれ、ここ帝都一番の探偵事務所の所長である。

「僕たちが怒られないよ〜に、この異界は僕たちが処理しま〜っす」  
「ちっ！！」

薫は盛大に舌打ちをし、花崎の肩を叩いて事務所に退散。

傍先の事務所は、探偵業ともう一つ“封道ふうどう”を商売にしており、勿論国からの認可も降りているため、国の許可なく異界に入り、事態を最後まで收拾させることができる。

つまり、権力的な問題から、仕事場を奪われたということだ。

ほんの少しの道のり、イライラを回りに散布しながら薫は歩き、事務所へ繋がる二階への階段に、子供が一人座っているのが目に入る。

半ば乱暴にその横を通り、それでも大人な態度を忘れずに「ごめんよ〜」とだけ吐き捨てて、ズンズンと階段を上がっていく。

その後ろを通る花崎は少し戸惑った。体が大きい分、いくら子どもとも言えど、その横を通り抜けることは困難に近かった。

薫は事務所に着くや否や、上着を応接椅子に投げ捨て、さっきまでいた、まだ微妙にぬくもりが残る自分の椅子に腰かける。そして外を再び眺めて、遠巻きから野次馬をしている人たちを見下ろす。

ドアが閉まる音がする。今後の身の振りを相談しようとした矢先、足にひつついている何かを見つける。

「おい、それどうした」

「お客様です」

当然だと言わんばかりの表情と言葉の強さ、あっけにとられつつも半ば心で笑いながら、薫は花崎を否定する。

「お前はバカか、私たちは過去最高記録タイの一週間と三日仕事が無い生活を送ってるんだ、ガキの遊びに付き合ってる暇なんざ、こ

れっぽっちもないんだ」

「だーかーらー」

『だ』で一歩を踏み出し、『か』でソファの背を蹴り、『ら』で薫の机を叩き、追い詰めるように説得する。

「この子がお客様です」

「はあ〜？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3342o/>

---

変わり者達の白昼夢

2010年10月16日03時03分発行